

映像研究への新しいアプローチ

— 京都大学文学研究科・国際連携文化越境専攻の取り組み

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ

本専攻は、2017年に開設された新しい大学院（修士及び博士課程）プログラムである。京都大学の文学研究科に属しており、名称がJoint Degree Transcultural Studiesであるため、通常「JD」と呼ばれている。京都大学と「ドイツ最古の大学」として知られるハイデルベルク大学で計2年間（修士）学び、両大学から学位が取得できる、日本の人文社会学領域では最初の試みである。カルチュラル・スタディーズと同様、トランスカルチュラル・スタディーズは、いまだ特定の学術領域（discipline）として確立していないが、院生として研究を始めるにあたり、今までにないアプローチができるのが特徴的である。例えば、映画・映像研究の秀でた大学で学びながら、今後の研究に役立つ英語の語学能力を集中的に高め、学際を切り開く研究者としての可能性を掴むことができるプログラムだと、我々一同考えている。このたび、本会報の場を借りてこのJDプログラムを紹介したい。

JD専攻には三つのフォーカスがある。その一つが「Visual, Media and Material Culture（視覚、メディア、物質文化；公称VMC）」だ。VMCフォーカスでは、魅力的な映像・映画のコースが提供されている。私も本専攻の教師として「Introduction of Transcultural Studies（文化越境学入門）」「Queer Theory / Queer Cinema（クイア理論／クイア映画）」「Transcultural Asian Cinema（アジア映画における文化越境性）」「Ecocinema（エコシネマ）」といったコースを教えている。その他にも「Feminist and Queer Film Criticism（フェミニスト映画理論・クイア映画理論）」「Russo-Japanese Cultural Dialogue Through Images（映像から考える日露文化交流）」「Japan at Play（遊びにおける日本）」「Studying (Sub-)Cultural Practices（〈サブ〉カルチャー実践研究）」などがある。本専攻は、次世代の映像研究者にとって、新たな視覚メディア研究の可能性をみつけることのできる環境であると同時に、全てのコースが英語で運用されているため、日本語圏という一つの文化を越境するための学びの場でもある。

JD専攻がどういった学びの場であるかを報告したが、実際にどのような学生が学んでいるのか、また彼らがどういった方向へ巣立っているかを伝える必要があるだろう。受験勉強に明け暮れた学生が、その4年後に大学を卒業する段階で、自分にとって理想の将来を描くことは想像以上に難しい。JDにやってくる学生たちを見ていても、引き続き大学院に残って研究者を目指す学生と、JDでの経験や修士号のディグリーを手にしながら、より自分の理想に近い職場を目指す学生との割合は、30% vs. 70%というところだろうか。

JDの学生たちの背景はバラエティーに富んでいる。彼らの国籍を見るにつけ、本専攻が世界中の若者たちに門戸を開いている実情を見ることができよう。日本、中国、台湾、スペイン、ドイツ、オーストリア、リトアニア、オランダ、パラグアイ等、異なる文化的バックグラウンドを持つ学生たちが、JDでの二年間に仲間を作る。2020年度は、計5名の学生が文化越境専攻から卒業した。長年の準備期間を経た後やっと軌道に乗ってきた新専攻だが、順調に水準の高い学生たちを輩出している。JDから羽ばたいた学生たちの進む世界は広い。オックスフォード大学やハイデルベルク大学の博士課程で研究を継続する学生たちのほか、東京で希望のIT産業に就職した学生（楽天、デジタルガレージ、ドイツ日本電産）、自国に帰ってジャーナリストを目指す学生、NHKにディレクターとして採用された学生もいる。また、在学中の学生（修士2年）の一人も、国際交流基金への就職が決まったと先日笑顔で報告にきた。彼らがJD専攻を通して得た学識や経験は、このように大きな可能性へと結

びついている。

2020年春から蔓延したコロナ禍の影響により、思いも寄らない非常事態が今も続いている。コロナの影響は、日本とドイツを行き来するJD専攻の学生にとっては想像以上の痛手となった。昨年9月に来日する予定であったドイツ側の学生たちは、日本政府からの入国許可がなかなか取得できず不安な時期を過ごした。また、ヨーロッパ出国直前のPCR検査で陽性が判明した学生もいた。京都大学から送り出すはずの学生も、大学規定の安全基準によってドイツへの出国が延期された。なによりも、多くの学生がオンライン授業を強いられ、新しい友達も作れず、鬱を引き起こす要因が満載の一年余りであった。ワクチン接種の普及によって、JDの魅力や利点が、いち早く十分に味わえる時が来るのを待ち望んでいる。

一方、吉報もある。2020年度からJDの大学院入試の方法が刷新された。本専攻への申込者は、国内からだけではなく海外からの受験者が多いため、他専攻のように筆記試験を課すのではなく、欧米圏の大学院選考と同様、書類審査及びインタビューによる入試方法へと切り替えた。また、博士課程も新たに増設された。こちらは国際連携（Joint Degree）ではなく、JDで築いた理論的基礎をもとに、京都大学大学院文学研究科で博士課程を過ごすというプログラムだ。こちらの方も書類審査及びインタビューによる入試方法を2023年度から始める予定である。

「文化越境学／Transcultural Studies」を学ぶということは、異なる言語・文化圏、思想・宗教・経済環境に属する人々が、互いをどのように理解し、そして多くの人々にとって平和で住み心地のよい未来を作るための方法を考える学問だと私は考えている。このような基本理念を、本専攻から、また京都大学から拡げて行くことが、我々の目的だ。こういった新しい研究アプローチに飛び込むことのできる元気のある学生を、是非今後ともご紹介したい次第である。尚、国際連携文化越境専修に関する詳しい情報は、以下のURLから参照できる。

<https://www.cats.bun.kyoto-u.ac.jp/jdts/ja/>



（みつよ・わだ・まるしあ一の

／関西支部、京都大学大学院文学研究科・教授）